

【資料紹介】

山形藩水野家奥日記

翻刻・解題 畑 尚子*

目次

凡例

1. 山形藩水野家奥日記 (元治元年)
2. " (明治元年)

解題

凡例

ここに紹介する2種の資料は、当館が所蔵する2冊の記録(資料番号93200165-6)を翻刻したものである。

- 1 資料の註および解題は、末尾に付した。
- 2 翻刻にあたり、たて書の本資料を、すべて横書とした。そのため、原資料の様式はかなり損なわれたが、なおたて書の様式を残すよう、書出し・年月日などの位置に配慮した。
- 3 文中に適宜、読点(、)および平列点(・)を加えた。
- 4 「かな」は、地名・人名を除きすべて現代の「かな」にした。したがって多くの資料集が用いている「而・茂・与・者・得・之」などは「て・も・と・は・え・の」とし、方向・指示を示す助詞の「江」は「へ」とした。また合字の「あ」は「より」、「ゞ」は「して・として」とした。
- 5 漢字は、現行の当用漢字・常用漢字のあるものは、それを用いた。
- 6 欠損・蝕損などにより判読不能の文字は、その数を推して□□……□で示した。見せ消し、抹消字で判読可能な文字は、そのままに記し、下に塗抹記号ゝゝゝを付し、訂正記事がある場合は上に示した。判読不可能な場合は、その数を推して■●……■で示した。
- 7 踊り字は、漢字は々、平仮名はゝとした。また2字以上の仮名の踊りに使う大返し「〜」は、その字を繰り返すこととした。(例「はる〜」→「なかなか」、「はる〜」→「はればれ」)
- 8 その他、一般の資料集による凡例に準じたが、特に校訂・編者による注記は、すべて()内に入れた。

* 当館学芸員

1 山形藩水野家奥日記（元治元年）

「日記」

元治
文久四甲子年

正月十一日丑雪

一御上屋敷より御使来ル、御返事出る、
若殿様御方にて御福引被遊候由にて、お錦
様私へ御品被進候事

正月十五日巳天氣

一御上屋敷より平礼にて申上ル
殿様去ル八日大坂へ御着被遊候由申上り
一殿様海上益御機嫌克去ル八日大坂表へ被遊
御着候間、右の趣申上り候
猶以 御着坂同十日直々京都へ被遊御着候
旨申越候間、右の趣別段不申遣候間申上候、
以上

正月十九日酉雲り雪

一京都表より正月十二日出御便り、御上屋鋪²⁾
へ今日当着、かもりより手紙参り候事
一今日御福引有

正月廿八日未天氣

一お錦様今日より御琴御遣いニ被遊候

二月七日卯雪

一今日四ツ時御用召、御役扶持二人致候、右
御礼ニ罷出 鎌三郎
一明後九日京都表へ御便りニ付、お錦様私よ
り御書御上屋敷迄差出し候事

二月十三日酉雲り

一京都表へ十四日御便りニ付、私より書上致
候事

二月十七日丑天氣

一御やとい³⁾ ふじ
不快ニ付御暇願、願の通り御暇被下候、年
来御やとひ相勤候ニ付、私より御目録金三

両被下候、お錦様より 金百疋被下候

二月廿一日辰天氣

一京都表へ御用船出候ニ付、塩漬なす・ちそ
のミ差上候

三月七日午天氣

一京都表へ御便り出候ニ付
殿様へ 私より御書上致候事

三月廿九日

一京都表より御便りニ付手紙参り、かもりよ
り
殿様より 兩人へすぐ御茶つほ・氷砂唐・
鷺しらす

四月十七日

一京都表へ御便り出候ニ付、■私より御書下
今出ス、かもりへ

四月廿三日

一京都表より御便りニ付
殿様より 対州雲丹
丹後宮つの御くわし
手紙参り、かもりより

一京都表御便りにて

殿様内々御拝領物被遊候御事申上り 恐悦
申上り 御老寄
御用人

五月七日天氣

一京都表より着致 ^(右カ) 善左衛門・かもり
あたか・常吉

かもり不快ニ付御使ニ参る

五月廿一日申雨

一昨廿日巳ノ刻過
公方様 御軍船にて
還御被遊候、此段 申上り

- 一去ル二日於京都
公方様御参内の節
殿様供奉にて参内被遊候処、被拝龍顔天盃
御頂戴、別段御太刀一振御頂戴被遊候、此
段申上り 御年寄弥右衛門
- 一右御内祝として
若殿様へ 御肴料金百疋被進候
五月廿三日
- 一京都表より着致候ニ付罷出
お錦様へ 御文庫おいろちよこニツ
私へ 御文こ二くミ御すもし
五月廿四日
- 一京都表より着祝として御酒被下
六月朔日
- 一御肴被下 関善右衛門へ
六月四日 かもり
- 一京都表より着致初て罷出
お錦様へ 本かさし二本
匂ひ玉
私へ 尾州焼御組小重
白玉ニツ
六月八日
- 一殿様御事去ル二日三日の内大坂表へ被為
入、大坂にて二日御泊り就被遊、夫より御
軍艦にて御舟中三日程の御日積りにて、八
日九日の内御着の御日積の旨、去月廿日出
の御飛脚御至来ニ付右申上り候事、善右衛
門より
六月十一日
- 一殿様去六日京都表御発駕、即日大坂へ 御
着同九日目前より御軍艦へ被遊御乗込御機
嫌能今未ノ下刻被遊御着候間、此段申上り
一御上屋敷右御祝
御二方様御分 御吸物御酒 相廻り候御事
- 御小皿肴二種
六月十二日
^(原説)
一御上舗へ御着の悦恐の御使出る、右御返事
便りニ
殿様より御式方様へ御肴被進られ候
一御着御祝として
御式方様へ御吸物御肴上り 召人 貞 蔵
鎌三郎
三 若
貞 順
六月十四日
- 一京都表木村くのさくへ金貳百疋被下、右の
御礼文ヲ以申来ル
一京都表より着致候悦として
私より 杉折御肴一抱被下候 岩崎彦右衛
門へ
一お錦様へ 御うちわ二本 岩崎まち
小文この内御手遊
大方様へ 御茶わん・きびしよう
せんすかけ献上
六月十五日
- 一殿様大坂表より御持帰り被遊候御酒一たる
被進候
六月十七日
- 一御上屋舗より御使来ル
殿様京都より御土産として
お錦様へ 内裏壺対
還女三人
御人形一ツ
御婦序の内 小文庫
御ふんちん
毛植のちん同午
同鶯の御つめ入
私へ 御銚子壺対

	御德利売対	近賀七左衛門
	小御茶わん箱入五ツ	六月廿四日
	御猪口一ツふりつき茶わん	一暑中伺罷成、京都御ミやけとして
	ふり付御茶入二ツ	お錦様へ 御花かさし
御茶たんすの内	御こんろ一	御まゆはけ献上
	御きひしよ	私へ 御亀すまし献上 同日
	御茶わん五ツ	一お錦様御おとりのいしやううらも様代り金
	御水こぼし	式両二分二朱遣し候事 増田屋七右衛門へ
	御とひん引	六月十九日
	御香はし	一暑中伺罷成、京都より御ミやけとして
	御うちわ	お錦様へ 御まゆはけ 男依
	御茶み	私へ 御茶わん五ツ入箱 同人
御式方様外ニ	御葉うちわ三ツ	六月廿二日
	御まゆはけ三ツ	一暑中伺罷成、京都より御土産として
	御匂の玉二ツ	お錦様へ かなきん坂して献上
右の通り被進候		私へ 御やかん ^岩 彦右衛門
六月十八日		御例にて御吸物被下
一殿様明十九日麻御上下にて田安仮御住居へ		六月廿九日
御出仕被遊候様、御用番備前守様被成御達		一御二方様へ京都よりの品
候様御不快ニ付田沼玄蕃頭様へ御名代被遊		御うちわ琴つめ箱
御頼候旨、右の趣申上り		御羽織御ひも献上 鏡治宿より
六月十九日		七月二日より
一殿様為 御名代 田沼玄蕃頭様 御登營被		一御上屋鋪へ
成候処、於御座間来年四月		御二方様御入ニ付五ツ時の御供前にて
権現様二百五十回御忌ニ付、於日光山 勅		御供 団 蔵
会万部御執行ニ付、惣奉行并ニ西丸御普請		三 肴
御用被為蒙仰有、又西丸へ御移徙の御用被		吉 野
遊御取扱候様被仰出候段 御用番備前守様		ま 瀬
より被仰渡候間、右申上り		八 十
六月廿三日		し ま
一暑中かたかた罷出、京都御ミやけとして	一殿様へ	御肴料金三百疋
お錦様へ 御小文庫の内 御琴つめ入	若殿様へ	御反物御手遊
御まゆはけ二ツ	御子様方へ	御ゆかた御手遊
私へ 御茶わん箱入五ツ		御包の内品々

御二方様より 御すもし料 千代山初
 金三百疋
 同別段 玉子料 千代山⁶⁾
 百疋つゝ 富山⁷⁾
 同 百疋被下 奥附へ
 御貳方様より御さいく物千代山初一統へ被下
 同 手ぬひはし袋 男子御相手
 私より別段御きせる被下 か代へ

七月四日

一御逗留中御慰ニおとり致御覧ニ入、御ほう
 ひととして、金貳百疋被下 か代初へ
 別段御ゆかた被下 とせへ

七月五日天気

一今日御帰りニ付
 殿様より御二方様へ御肴料被進候事
 一殿様より京都よりの御品別段ニ御入ニ付
 お錦様へ 御紙ばさミ・御きせる
 御たばこ入・御扇子三本
 御こしも様・御茶ふくサ
 ■■■■
 八丈一反・御茶わん
 高砂染一反
 殿様より私へ^(辨カ) 非縮面一疋一反
 白縮面一反
 嶋縮一反
 御羽おり一
 御むかう付皿一箱
 御扇子二本
 御砂唐一箱

右の通り被進の品

一殿様より 黒縮めん御紋付表一
 御福サ被下 吉野へ
 御ふくさ被下 まさ初一統へ

六月廿八日

一暑中伺罷成、京都より御ミやけとして
 御二方様へ 御菓子入 牧田幾右衛門献上
 御酒ちよこ

七月廿六日

一今朝近藤雄依罷出申上候儀、長州家来多人
 数罷出⁸⁾、御中屋敷へ相集候よし、右ニ付近
 隣総贈分かた右御屋敷堅仰付られ候ニ付て
 ハ、如何様の騒敷事に相成候間敷哉も難計、
 依ての 堀右京之助様御頼にて御隠居様御
 姫様俄ニ当御屋敷へ御立退程無被為入候、
 其段申上られ候、猶申聞候よし御役前より
 申上候内もはや被為入候ニ付 吉野奥附
 御出むかひニ出候事、直々御居間ニ御通り
 被遊御昼御膳御夕御膳上り今晚御とまりニ
 も相成候所、御もよふも相わかり六ツ時頃
 に御帰り被遊候、御供

右御供惣女中へ 老女二人
 御膳被下候 春野
 浜野
 御隠居様御ひろいにて被為入候 御側
 御姫様御駕籠にて被為入候 御次
 御末
^(屋説カ)
 部方一人

一右ニ付御上屋敷より御使来る
 御うなき被進候 中嶋団蔵罷出

八月三日天気

一殿様今日於 御座間 松平大膳^(大説)夫様為御征
 伐御進発の節御留守并御兵衛被 仰付候
 間、右の趣申上り 御用人

九月廿四日

一此度鑰平娘さく平兵衛養女ニ願出し候処、
 お濟候事

十月六日

一去ル三日より御上屋鋪へ 吉野

若殿様御子様方浅草辺へ御出ニ付、今日より逗留、今日帰り候ニ付
 御二方様へ さげ二本被進候
 金百疋被下 吉野
 私^{より}願候ニ付 白縮めん一疋
 御召縮めん一反
 高砂染一反
 お錦様へ献上いたし候事 白一疋
 うす色色一反
 はかた帯地一反
 右の通り被下 きくへ
 十月八日天気
 一此度あら井薬師様よりほりの内へ御出ニ付、御供ニ千代山殿逗留、御たのミニ相成罷出候ニ付
 私へ金百疋御肴として献上
 お錦様へ御包の内献上
 殿様より大こい三本被進候
 十月十日
 一御用向にて罷出 かもり
 一御出ニ付入用金として
 殿様より金五両被進千代山持参、残り金三分返上致ス
 十月十二日
 今日松嶋屋より便参り、着物・くし・かうかい帰し候様ニ申参り、きくより帰し候事
 十月十五日雲り
 一今日より御上屋鋪へ昼九ツ時御供揃にて御供
 鎌三郎
 三 肴
 御かち目付一人
 殿様へ 御式方より 御肴料金二百疋
 若殿様
 御子様方へ御手遊

金二百疋御すもし料 一統へ
 金百疋 千代山
 とやま
 かし代
 奥附三人
 御方附へ被下
 御相手小共半紙三状ツゝ
 十月十六日逗留
 一御上屋鋪へ召候ニ付上り こと
 殿様へ 御肴
 若殿様へ たこ糸
 御子様方へ 御手遊 御次へはま
 一御機嫌伺上り
 御二方様へたる柿献上
 右は御移りニ御上屋鋪より被下
 一御用向^{西下にて}是有、岩崎彦右衛門殿へ今逢候事
 十月十七日御逗留
 一今日御上屋鋪へ上り候ニ付
 殿様へ 御肴
 若殿様御初へ 御手遊献上
 御次ニ一統へ 御くわし
 一私へ 半切・豆なつとう 献上 元讓
 右御挨拶として金百疋被下
 十月十八日御逗留
 別条無之
 十月十九日
 今日八ツ時御供揃にて御帰りニ付
 殿様より 御二方へ 御肴料金三百疋
 殿様より 高砂染一反
 お錦様へ 御地服紅一反
 御地服御紋付、御めりやす御召一ツ
 殿様より私へ 御紋付羽織一ツ
 白七子一反
 白縮めん一反

	白二重羽 ^{下上} 一疋	一御 ^{御二方} 二方様へ 御赤飯御肴献上 同人
御二方へ	御地ふくわた十袋	奥向一統へ赤飯
一殿様より	八丈嶋御召 吉野へ	一 赤飯肴こち・かれい・たら 松嶋屋へ
	金二百疋被下	十月廿六日
一殿様より	白縮面一反 まさへ	一今日御機嫌伺上り
	献上物御挨拶として御目くろく被下	御二方様へ 御うなき・たはこ献上
一殿様より	六行御紋付表黒縮めん ことへ	十月廿五日
	三から付たはこ入	一御用向にて参り候事 中嶋団蔵
	金のねかけ一わ	十月廿七日
	金二百疋被下	一御上屋敷へ御使上ル
一殿様より	御召縮めん一反 きくへ	若殿様へ御釣候たこ被進候事
	金ねかけ一わ	金五十疋上候事
	金二百疋	殿様より 御酒御肴被進候
一殿様より	御包の内 八十へ被下	一つり肴大ほら一本献上 平兵衛
	御はなを料	十月廿六日より、きく不快ニ付引込
今日御帰りの御供	鎌五郎	十月廿九日
(付箋)		御機嫌伺ニ罷出 たはこ入・うなき献上
「御逗留中		十一月朔日
お恵様へ唐草おもたか御紋付御はし被進候		今日出勤致 きく
お静様へそうけいさかは御はし被進候」		名改被下候事 ¹⁰⁾ 百 ^{ゆり} 合
	周 白	十一月三日
	目付 ^{かち} 一人	一殿様今日より御風邪御とのけと申候事 御
御供ものへそは御酒被下候事		登城御延引
十月廿日		霜月四日
一御上屋舗より御使来ル		一殿様御風邪御引、御見舞として御使ひさし
殿様より御二方へ こひ一重		出ス、御返事来ル
	ふだの御ひまに被進候	一京都表木村より文来ル、当七月十九日大へ
一紫てれんぶ玉付たはこ入 か代へ被下		ん類火致候事申来ル
十月廿一日		霜月五日天気風
一殿様より 御酒被下		一殿様御風邪御同様と申上り今日も御引、御
十月廿二日		見舞夜具持にてさし出ス
一今日養子内祝致候ニ付		一お錦様 ^當 当月御内祝被遊候御事、承知致候よ
御上屋舗へ 赤飯二重献上		しにて 御肴一折献上 や木やより
御肴たい一枚 篠塚平兵衛より		霜月六日

一殿様御風邪今日も御引と申上り	御次向	七福	五百崎
一市ヶ谷 ^(ヶ谷カ) 様より御上屋舗へ御使にて		同	千代山
若殿様		同	富山
お錦様お静様当月御祝ニ付		同	千え
御二所様より御帯地被進候由申来ル		同	こと
一私はり致候ニ付出 吉見		同	さえ
七月被下候御目くろく今日		同	きた
金二百疋被下候事 同人へ		同	末二人
一今日御祝の御召御わた入ニ上り候ニ付	十一月十六日		
お錦様へ 御くわし・御絵五枚献上 この	一殿様今日御出番御登城被遊候		
一市ヶ谷 ^(ヶ谷カ) 様より御使来ル	一今日九ツ時過比より青山物参候、出火烧尤		
御奥様より 兩人へ	外ニ別條無こみ焼と申事ニ相成候、御機伺 ^(機伺)		
お重の内おふく一重	として		
花御かさし二箱被進候			御年寄
右紙替りとして水あめ被進候			御用人名代
十一月七日	御使として罷出		岩崎与惣殿
一殿様御風邪御快よく御登 城被遊候申上り	一御上屋舗へ御とゞけ申候事 御使ニ団蔵罷		
一御上屋舗より御至来の由にて、御肴品々上	出、御見舞被進候 御肴・おふく一重		
せ候	一市ヶ谷様より此程御挨拶として御使来ル、		
一お錦様御祝ニ付、市ヶ谷御式所様より御帯	御返事出ス		
被進候、御上屋舗より相廻り候事	御奥様より 私へ 御菓子たんす		
霜月十日			御くわし入被進候
一亀甲織御瀉沢御紋付御羽織被下 平兵衛へ	右の帰りニ水あめさし上られ候、此程御礼		
十一月十一日	申上ル、私へ 五百崎より 御せん一重献		
一菜漬一たる参り 松嶋やより	上		
十一月十二日雨	十一月十七日		
一殿様御風邪にて御引被遊候	一昨日の御見廻りとして御名代若殿様御入、		
貞蔵より御申上り	九ツ時過御供揃にて御入あそはし、夕御膳		
十一月十五日	上り七ツ半時過御帰りニ相成候、御入ニ両		
一今日有卦 ¹¹⁾ ニ御入被遊候ニ付	人へ御杉折一箱被進候		
堀様御奥様 ¹²⁾ へ	十一月十八日天気		
御文この内七福く被進候	一今日大そうし致候事		鎌三郎
市ヶ谷様御奥様 ¹³⁾ 御同断			平兵衛
御文この内七福く被進候			三 肴

一御機嫌伺として罷出	はな	十一月廿二日
一御機嫌伺として文にて使来ル		私より香料金百疋被下 幸兵衛へ
御二方様へ御うなき献上	根本ひさ	十一月廿三日 ^(マツ) さる天気
十一月十九日雨		御上屋鋪今日戌下刻南小屋より出火、長屋
一昨日御挨拶として御使被下		一棟致焚失候、尤類焚無御座候へとも、御
私より 氷おろし・くすふ快ニ付ひさへ被下		差様之儀御用番丹後守様へ被成御伺処、即
御帰りとして御くわし折として		刻不及御差様候間、見集相儀候間、右の段
一ふ快見舞かたかた御礼被下	ゆりより	十一月廿四日雨天氣昼過雨
氷さとう料五十疋	ひさへ	一御上屋鋪へ九つ時御供揃にて 吉野・まさ
一今日下り候ニ付	この	御二かた御入御供 まり・八十
お錦様御祝御召三ツ外ニ品々御用致候ニ付、金二百疋御包の内被下		一明廿五日
一御上屋鋪より 松嶋や		御惣客様御誕生日御祝儀并ニ
御挨拶として御目録式反被下		若殿様御結ひ初御祝儀 ¹⁴⁾
一和泉守居屋敷當時下馬内ニ相成居候へ共、		御錦様御かね初御祝儀 ¹⁵⁾
家族男女用向有之下屋敷其外へ罷越候節、		御静様御髪置御祝儀 ¹⁶⁾
都ニ寄切持にて御門々出入の砌、附添の家		右ニ付
来共より口上にて相断通行為致度奉存候、		一御惣客様へ私より 御肴一台差上候
此段御門々へ御断被仰渡候、以上		殿様へ御土産として とちうなべ共一箱
十一月十九日 水野和泉守内 松本帯刀		若殿様へ 御技たこ三枚
御附左の通		御子様かた 御手遊
書面の通て不苦候間		御包の内被進候
三ヶ所御門々へ相達置候		一御二かたより 金貳百疋被下 千代山初
十一月廿一日		別段金百疋 千代山
一堀様より此程の御挨拶として御便来ル、御		とふ
返事出ス		か代
御奥様より私へ		同 目付三人
御くわし折		同 御方たき初へ
御重の内半へんにかいのはしらせり		同寸紙三状つゝ 御相手六人
右の御帰りひぢき被進		御白粉かんさし 女遊手へ兩人
一青山奥御用達 大太幸兵衛		一殿様へ 御肴献上 こと・ゆり
九月十一日より不快にて引込今日養生叶不		一お錦様御事
申死去致候旨、申来ル		一此度御祝ニ付御仕舞道一色、御表より相廻
		り候事

十一月廿五日
 一御惣客様御誕生日御祝儀ニ付、御昼御祝御膳上り、夕御吸物上り、赤飯御すはり上り
 一若殿様御結び初御祝ニ付
 殿様より 御のし目一重
 御上下被進候
 一若殿様へ
 私より 御袴^(か)一同へ
 一殿様より
 お錦様へ 黒縮緬御惣模様
 御白小袖一紐
 一殿様より
 お静様へ ひ板^び御ふり袖
 御帯一筋
 一お錦様へ
 私より ひ縮めん御相着
 一お静様へ
 私より ひしほり御仕こき
 一御三方様御祝ニ付 御肴献上 千代山初
 吉野初より
 一若殿様 御肴献上 こと・ゆりより
 お錦様へ
 一若殿様へ 御下汰^(駄か)一献上 こと
 一お錦様へ しほり御袖献上 ゆり
 一御子様方へ 御こまた献上 こと・ゆり
 十一月廿六日迄御逗留
 十一月廿七日子天気
 一今四つ時御供揃にて 御帰りニ付
 殿様より御二方へ 御肴一籠うつら真鴨貳羽
 一お錦様へ 御肴料金七百疋
 御帯地一まき
 きやまん御菓子入
 一殿様より私へ 白縮めん一疋被進候
 十一月廿八日丑天気

一私少々時かう障り御薬り上り 三着
 十一月廿九日無
 十一月晦日
 一山形表より むし漬大こん献上
 大石伝右衛門
 一拝郷内蔵殿事依頼去廿八日出府致候段、翌日御用有之候ニ付、来る春迄滞府致仰付候間、右の段申上り 御用人共より
 十二月五日
 一お錦様へ御水菓上り 名くら弥五郎^(倉)
 十二月六日天気
 一御上屋舗へ御使出る
 此度
 御錦様御鉄様初御祝儀ニ付
 堀様御奥様へ御鉄親御願被遊候、右の御礼としてかすていら一重差上候、御上屋敷より相廻り候事、右御帰りとしてころかき被進候
 十二月八日亥朝天気雲り雨
 一今日八ツ時八分寒ニ入
 御二かたへ 御居上り
 十二月十二日卯天気
 一寒中伺として使来ル
 御二かたへ 真鴨二羽献上いわ礪えび
 十二月十三日辰天気
 一御吉例通り相済、御祝御膳上り
 一寒中申上罷出 拝郷内蔵・岩崎彦右衛門
 御貳かたへ ミかん一籠献上
 私へ 別段蒲焼切手一枚献上 彦右衛門
 御吸物御膳被下候
 十二月十四日
 一御錦様御祝ニ付
 御肴一籠
 御わいたい三枚献上^{かじ町} きえ

十二月十五日午天気

一御錦様御延日御祝ニ付夕吸物上り
一御錦様御鉄初御内祝ニ付、御肴料金百疋献上
吉野初奥一統より

一夕召人御吸物式種御肴御膳被下 貞 蔵
平兵衛
鎌五郎
三 肴
貞 順

一お錦様へ 大年物献上 鎮 蔵
一お錦様へ 御肴料金五疋 角田この
御かんさし 献上

同 献上 御肴 は な
御二かたへ 御肴・御さつ 献上 こと
一私^(へ脱カ) 御酒三ツ割たる献上 彦右衛門より
十二月十七日

一御錦様へ献上物御挨拶として 吉野初御遊手
金百五十疋被下候 きた・とよ・ふしへ

十二月廿四日天気

一 奥附添 吉原九兵衛
一私附被仰付役扶持二人扶持被下候間、右の
段申上り 松本弥右衛門

十二月廿八日

一歳暮御祝儀として御使 千賀七左衛門
殿様
若殿様より干鯛一折

一お恵様
一お静様より 御使奥附

十二月廿九日晦日天気

一御二方へ 御福茶¹⁷⁾上り
御荒麦上り
御吉例相済 万年

2 山形藩水野家奥日記 (明治元年)

(表紙)

「
九月朔日より 寿印

日記

」

菊月朔日天気戌

一昨日の御礼として彦右衛門罷出候、今日よ
り京都表へ参り候趣、申上り
一昨日の御礼として罷出 志賀すゞ
柿献上 惣次郎
右御帰りとして干とゝ被下
一道中にて荷物水ニ入候ニ付御表より御手あ

てとして、金三両被下 ひてへ

一 奥附へ
お恵様御附 はま¹⁸⁾

年来実体相勤候ニ付、御側格被仰付御宛飼
並の通り被下候、右可被申渡候事、申上り
九月二日天気

一今日御二階にて御昼御弁当有、御酒御肴
品々献上、蔵元¹⁹⁾より
御釣致候事

一今日柳こり大一ツ小一ツ上り候事
一昨日江戸表より十一日出立、十四日立川
さゝさくにて一所二着致候趣御聞候

一大もりのり・浜松名とう、御蔵元へ被下
九月三日天気

- 一今日松たけ・しめじたけ献上、御蔵元より
栗おやつニ献上
- 一山神ふとうへ参る 団蔵
九月四日天気
- 一寿印御月代今日致ス
- 一山神辺松たけかりニ願参る、夕七ツ半時過
もとり候事、松たけおさつ献上
九月五日天気
- 一今日御釣りニ参り候事
九月六日天気
- 一江戸表へ御便り出候、富山より政田へ文出
候事
九月七日天気少曇
- 一今日月代致ス
九月八日雨少々
- 一無事
九月九日雲り
- 一御節無し、御三日廻り、御召かへ計、御三
日用着致、御次向平日返り
- 一朝御膳御赤飯くりミ御膳上り、御昼御焼物
付御膳上り御酒上り
- 一今日京都より岩崎彦右衛門もとり御逢有、
夕召御吸物御酒被下候事
- 一字野七兵衛より 御むし菓子一折献上
九月十日天気
- 一今日大津四ノ宮大明神御祭礼ニ付御覧、所用
参り、御吸物御肴品々上り候事、御蔵元より
- 一山保子十四本、御見こし三ツ御しよ柿木、
其外品々見物致候
- 一御蔵元案内召御逢有候事
八丈嶋一反・御肴料三百疋被下候事
- 一御表より蔵元へ御祭礼ニ付金五百疋被下、
御地走献上ニ付金五百疋被下候事、但八丈
嶋ハ寿印手元より有合出ス、三百疋御目く
- ろく御仮所より出候事
九月十一日天気
- 一至来致候由にて大栗献上 御蔵元より
- 一今日京都へ罷出候趣申上り 岩崎彦右衛門
- 一今日御蔵元にて御慰ニと申て²¹⁾檢校初罷出、
三曲御覧ニ入候事
四季富士
末ノ契
里の暁
乱
磯千鳥
鶴のすこもり
玉川
深夜月
御好 さらし
御好 松竹梅
- 一右御好申候ニ付金五百疋 寿印より被下候事
- 一京都より御人形大小ニツ相廻り候事
- 一方々様へ御覧所へ御地走品々出候事
御吸物・御酒・御肴・夕御膳上り、御菓子
御茶上り候事
- 一江戸表より御便り来ル
- 一一筆令啓達候
殿様 大殿様御道中 益御機嫌能、昨朔日
辰上刻被遊御着座候
上々様益御機嫌能、大津表へ可被遊御着座
旁奉恐悦候、御用儀は別紙相達候、恐々謹言
九月^(マ)十二日出 柘植内匠
牧田幾右衛門
岩崎与惣
徳賀七左衛門
青山光之助
拝郷内蔵
岩崎彦右衛門殿

一両殿様益御機嫌能江戸表へ
御着座被遊候趣、恐悦申上り候事
奥附迄 岩崎彦右衛門より
一御便りニ付恐悦申上、富山迄文来ル
政田・吉野より
九月十三日天気
一十三夜月よく晴歌よみ候事
御蔵元より□□こま・御かちん献上
九月十四日天気
一無事 今日
九月十五日天気少々雨
一今日御二様へ御弁当ニ参り候事
御釣り致候事
九月十五日
一今日京都表へ参り候ニ付
おしろい 惣春
はり糸白まな
九月十五日天気
一江戸表へ御便り出候ニ付
殿様へお錦様御二方様より御書さし上られ候
一寿印より政田へ文出ス
一外ニ吉野へ文、松たけ被下候
一飯田表²²⁾より御便り来ル、尤京都表より相廻
り候事
大殿様御改名の御悦として
金三百疋 御肴料
殿様へ右同断 金三百疋 同断
御式所様より被進候
御式所様より
殿様御三代御滞無済させられ候御祝とし
て、金五百疋被進候
御奥様より
大殿様御初として 御菓子一折
お錦様御初として 小御養かん一折被進候

一御奥様より
大殿様へ御書被進候事
一右御養かん小一折、御蔵元へ被下
九月十六日天気
一今日寿印御召長持見上し致候事^(カ)
九月十七日天気少々雲り
一今日朝五ツ時御供前^(備)にて御船にて
お錦様御初志賀唐崎へ御出有、かきやと申御
茶屋にて、御昼御弁当上り御蔵元より御道具
上り、御吸物しゝみにて御重つめおり御肴御
酒上り御次向一充へ被下、夫より御歩行に
て松を見物致、唐崎大明神へ御参けい有、
柳ヶ崎と申所迄御ひろひかたにハ小水に
て、山々のけしきよく夕日ニ入此みて御船
ニ召し、夕七ツ半時迄御帰殿ニ相成候事
一かき屋案内御次迄罷出、大有難かりきうり
御かゝかけ献上致候、御挨拶として奥附よ
り御目くろく少々被下候事
御供奥向女中一統 奥附団蔵
御いし惣春
御目付一人
御中小使四人の
内寄□□一人
御錠口一人、小遣一人
御蔵元より御あんないみせ一人参り候事
一今日京都より彦右衛門罷出候由にて申上
り、御逢無之
両殿様御機嫌克よし御便りにて、恐悦申上
候御事
一昨十三日八月分御持米代富山初被下候事、
御礼申出候、銀札にて一人持三分一朱
一江戸表より七日出御返事かたかた文来ル
政田より・吉野より
両殿様御機嫌よく申上り候事

九月十八日辰天気

一無事

御蔵元よりおハツニ御むしくわし献上

一九月分御持米代女中向渡り、銀札にて一人
持金壺両一朱分

九月十九日巳天気

一今日こま物や参り

かんさし・かゝミニツ・魚つりニツ上ル
お錦様御子様方へ

御かさし・かゝみ・魚つり被進候事

九月廿日午天気夕少々小雨

一今朝京都表より

禁中様 東京へ行幸

御発輦大津表夕七ツ時比、瀬たの御城へ御
着座あらせられ候事

一昨廿一日東京表御便り出候処

お錦様お恵様おしつ様より、吉野・政田へ
御書被下候、唐崎松被下

一梅印花印御詠草出ス

一寿印より御兩人へ

九月廿一日天気未

一今日東京へ出立致候、越前屋御用伺ニ罷出
候事

一京都よりハツ橋せんへい、金五十疋上ル

一今日御志し致御酒御せん被下 奥附兩人
富山初へ

九月廿二日天気申

一今日

禁中様御生誕御生延日(誕)のよしにて、誠ニ誠
ニ御まいり御悦致候趣、御蔵元にてぎ太夫
はなし候事、夕御吸物御酒御肴上り

九月廿三日天気雨

一京都表より使来ル、彦右衛門殿より

梅印様御初御半へり地三かけ参り候、金貳

両三分と申事

寿印より御三方へ被進候事

九月廿四日雲り戌

一無事 御蔵元より、おゆつくり献上致ス

九月廿五日天気亥

一昨日御蔵元より御酒品々入候、御道具

御三方様へ献上致候

一今日彦右衛門殿罷出御逢有

一明日廿七日ニ東京へ出立致候趣にて、参り
候ニ付富山より

殿様の御品相廻し候事、かつ木新吉御便り

ニ付政田迄文出し候事

一天万客へ参詣致候よし

御方々様へ はしり餅 平兵衛

はしきまめ

柿献上

九月廿六日天気

一酒井若狭寺様御使者安倍守、大津表御着の
(ママ) 23)
義御承知被遊ニ付、右御口上計申上ル候事
一明日より勝右衛門御領分へ御用向にて出立
致候趣、申上り候事

九月廿七日雲り夕より雨

一今日御釣りにて初て大なまづ

六ツ釣り申候 平兵衛

九月廿八日天気

一無事

一今夕蔵元より御酒肴品々献上候ニ付、御手
元にて御酒上り、団蔵・平兵衛へ被下

九月廿九日晦日

一無事夕御そは上り

御釣り参、沢山ニつれ候事

一寿印より京都より御とりよせニ相成、

御三方様へ御半へり被進候事

十月朔日天気辰風

一無事蔵元より夕御酒御肴品々上り、御酒被下候事

一御帯地上り 御代金老両二分也 岡野屋

一御たはこ入一ツ十一文 こま物や

あふき■■■ひも共

御うなこ一ツ

十月二日天気巳

一無事

十月三日(日説)天気少々雲り午

一御三方様今日御灸治上り

寿印より御いわひとして、御半紙三状ツゝ

被進候事

一御三かた様へ御灸被遊候二付、三組御ふた

物ニ御くわし献上

御小ふた物ニ御口取物

たもし玉子 御蔵元より献上

魚ひ御小肴

夕御膳の節御吸物外ニそうそう、御釣り御肴御ひとり上り

一今日京都表へ願参り 団蔵・又七・吉治

夕七ツ半時迄帰り候事

方々様へ 御焼おさつ献上 団蔵

十月四日未雨天

一無事

十月五日天気申

一今日京都より彦右衛門罷出、大津御屋敷見

廻りに参り候事 彦右衛門・団蔵

一今日大鯛一枚献上 彦右衛門

今日御逢無し

十月六日天気酉

一今日五ツ時御供前(備)にて三井寺へ御参けい、

夫より丑天神御参けい致高かんおん様参詣

致、御茶屋に御弁当上り、御酒御肴品々御

重つめ御道具類ハ御蔵元より上り候、御供

ハ

御表より 御目付一人・御小姓四人・

御歩行広目・御奥附団蔵・

御いし惣春・又兵衛・又蔵・

重三郎・安之助・御錠口吉

沢

奥女中残らす御供

十月七日雲り戌

一無事

十月八日亥

一亥子2)ニ付ゆわゆわ献上 御蔵元より

奥一統へ出ス

十月九日雲り子

一寿印御丸薬上り 惣春

一京都表より彦右衛門罷出御有無し御機嫌伺

罷出御帰り肴被下候、柿ミかん被下

十月十日雲りうし

一京都表木村より便参り御機嫌伺として

御着御悦方恐悦申上

御方々様 小鯛三枚・金平唐一枚 献上

右御挨拶として

方々様より 金三百疋被下

一寿印より御土産として、金三百疋被下候事

一今日御至来の小鯛御蔵元へ被下

十月十一日雲り寅

一九月廿三日東京表出立致、今日十月十一日

当着致候、団蔵家内初・三肴 ふし・其外

両三家参り候

一中村御りうしニ今日より罷出候事、御くわ

し被下

一御方々様へ 仲つたい・御くわし献上 三肴

一御方々様へ いかのしほから漬

玉あられ一はこ ふし

十月十二日卯風

一今日四ツ時より御船にて御屋敷見物ニ参り
 寿印御供 団蔵・御いし惣春・重の筋
 富山・八十・御中居一人
 御錠口御小遣一人
 御蔵元より御弁当参り候事、御屋鋪前町花
 月ろうと申御茶屋まで参り、御ミやけの御
 肴申付かへり候事
 御子様方御初、御元蔵^(蔵元)へ被下
 鯛御さし身・御吸物・御焼鳥・ミかん
 一御機嫌伺として罷出 志賀すゝ
 大黒せんへい献上
 十月十三日辰風夜ニ入地震二度
 一御投へ御備物
 大そない一柿・みつかんいづ
 一杉村善右衛門今日大津^{御類分より}■■■■もとり
 御方々様
 大和柿五十程・栗献上 善右衛門より
 一今日中村御暇事ニ罷出遠目
 十月十四日巳天氣
 一此程大黒せん献上致、右御挨拶として
 栗ふりこ入
 玉あられ一箱被下 志賀すゝへ
 十月十五日天氣午
 一今日江戸表よりハツ半時当着致
 方々様へ御逢有 柘植内匠
 両殿様御機嫌能恐悦申上候
 一今日上り候心への処不快ニ付、献上物上ル
 御鳥切身・こうしみつかん 中嶋せい
 十月十六日天氣申
 一今日東京表より御便り来ル
 両殿様 益々御機嫌能恐悦申上り候事
 殿様より
 お錦様、寿印、お恵様、お静様へ御返書被
 進候

一御船廻し御道具類相廻り候事申来ル
 十月十七日天氣酉
 一今日中村御りやうし致候■
 一今日京地より彦右衛門罷出
 十月十八日天氣戌
 一今日御蔵元へ彦右衛門罷出ニ付
 御酒御肴被下候処柘植へ参り候ニ付
 御肴御さし身御焼肴二種被下候事
 御逢無し
 一善兵衛より御釣り参り候事
 十月十九日亥天氣
 一無事
 十月廿日雨昼後晴
 一えひす講⁽²⁾ニ付御蔵元へさゝれ石と申名御酒
 二たる被下、御昼御膳、夕御吸物御酒御肴
 品々献上致候、夜ニ入、又兵衛夫婦御側へ
 召御酒被下候、其外御次の間にて御酒被下
 候事、右望二兵衛事、御内々御次の間へ罷
 出候事
 一富山初奥一統へも御酒御盃御膳出し候事
 一東京へ御便り出候ニ付
 御方々様同様筆出ス
 十月廿一日天氣きのへの子
 一御口取物一折献上 御出入方 伊賀屋作治郎
 一此程柿栗献上致候ニ付、右御挨拶として
 御口取物一折 杉原善右衛門へ被下
 十月廿二日天氣丑
 一無事
 十月廿三日雲⁽³⁾りとり
 一今日願出 団蔵
 御子様方へかた田のらくかん献上致候
 同人
 十月廿四日時雨卯
 一御子様方ミかん献上 三蒼へ

右御挨拶として御菓子折被下
 一江州浅井郡八木浜村²⁶⁾より舟にてとりよせ
 献上 杉原善右衛門
 御方々様へ 生鱒^{ます}三尾献上
 一右の鱒一尾御蔵先へ被下
 十月廿五日天気辰
 一今日御昼後日帰り御いとま願出、天幡宮^(ママ)へ
 参けい御屋舗へ参り候よし御さ候
 ミかん・ほうつき献上 団蔵・八十
 ふた・わかな
 錠口吉治
 十月廿六日天気巳
 一東京へ御便り出候ニ付富山より文出候事、
 堀様へ御返事出候
 十月廿七日天気午
 一御方々様へ献上 大小ミかん こと
 一八九十一月分金六百疋被下 ふじへ
 十月廿八日天気未
 一從 大目付・御目付江
 御所被仰出候御書付写
 恵けい 内御手伝御側一人 てい
 統ちう 御小間遣 そう
 睦りく 右三字 御末 二人 菖蒲・柏木
 御諱ニ付、名字等ニ相用申間敷候、改は勿
 論刻本等ニは關畫²⁷⁾可致候事
 十月 行政官
 十月廿九日天気申
 一昨日岩崎彦右衛門京都罷出、今日御機嫌伺
 ニ罷出候
 一今夕中村御りやうしニ罷出
 一昨廿八日ニ御屋敷へ御引こし候 中嶋団蔵
 十月晦日天気雨
 一今日東京より当着致候事 清水周白
 御方々様へ干鯛^{奥津}献上

十一月朔日天気戌
 一東京より御便り来ル
 両殿様御機嫌よく政田より富山へ文来ル
 霜月二日天気亥
 一両殿様十月廿三日御参代被遊
 御龍顔拝し奉られ、御天盃御頂戴被遊御料
 理等も御拝りやうのよし、桜田御屋敷三田
 御屋敷あらため御拝領被遊候趣申上り、菊
 川町御屋敷御拝りやう願済候趣、右恐悦と
 して罷出 岩崎彦右衛門・柘植内匠
 御逢有、御酒御肴被下候事
 一十月八日 大殿様三田御屋敷へ御引移り被
 遊候旨、御目付より持廻り候事
 但女中向は来ル十六日ニ引移り候趣、申
 来ル
 一^{十一日}從妙高寺祖妙会式ニ付、供物
 方々様へ差上候趣、右品へ御奥へ相廻し依
 其先例の通金百疋被下候事
 一^{十三日}宇津木俊吉着致、政田へ文参り候事
 一大殿様 御側二人
 内御手伝御側一人 てい
 御小間遣 そう
 御末 二人 菖蒲・柏木
 一來ル廿日於妙高寺
 浄心院様三回忌御法事有之候ニ付
 殿様より金百疋
 大殿様より金一朱、寿印より金壹朱、御備
 御座候、御手元より
 一大殿様 奥附当分仰付候趣 村田蟹守
 青山奥附当分清左衛門仰付られ候趣
 霜月三日天気子
 一今日京都参り帰り候ニ付 ふじ
 京都御せんへい 同人
 おいろ千代こ一ツ 献上

- 霜月四日雲りうし
 一御機嫌伺罷出 清水周白娘、しゆう・ゑい
 にし絵・御くわし折献上
 右御挨拶として御包の内くわし折被下
 一京都より今日帰り御ミやけとして
 千代紙・ちやうもんあめ 古金又兵衛
 十一月五日とら天気
 一今日東京より着致候事 吉野
 十一月三日卯天気
 一昨日着致候ニ付今日上り 吉野
 御子様方へ 唐ミかん・御手遊
 私へ 時雨はま・御茶献上致候事
 一両殿様御機嫌克申来ル
 御三方様へ銀かんさし被進候
 一御三方様御詠草御直し参り候 かもりより
 一東京にて仲中へ被下候品
 御仏前一・置戸棚一・御神前一・同一ツ
 御もし戸棚一ツ
 右ハ青山にて話致候面々、御酒代として被
 下候事、今日梯用より申来ル事
 十一月七日天気辰
 一御蔵元御稻荷様明八日御祭礼ニ付、私より
 御すゝの尾末白木綿納達候事
 十一月八日巳天気
 一今日冬来ニ付、御蔵元御二階^(ママ)にて御日の出
 御酒上り、御昼後より御酒御肴品々上り
 一今日御蔵元御稻荷様御祭礼ニ付、御神白上
 ルさゝれ石御酒二たる備候事、御次向富山
 初^(祝)一充御神白上ル、夕御膳御吸物御肴品々
 御蔵元より上り、ミかんまき候事
 一大坂表より帰り候由にて
 かすていら一折献上 杉原善左衛門より
 一御機嫌伺上り ふし
 十一月九日天気夕雨午
- 一無事
 十一月十日天気未
 一此程御挨拶として 団蔵へ
 かすていら一折被下
 一右同断、御くわし折被下 ことへ
 十一月十一日天気申
 一東京より御使来ル 政田より文来候
 殿様廿三日御料理御拝領被遊候由にて
 方々様へ 御肴頂戴致候事
 十一月十二日雲り西
 一寿印好候処
 御日かね一ツ献上 又兵衛御蔵元大坂より
 一御蔵元大坂より御客の人御くわし献上致、
 右御挨拶として、あまたい^(カ)千口七枚被下
 十一月十三日雨戌
 一寿印御りやうし罷出 中村
 十一月十四日雨亥²⁸⁾
 一今日より三夜御いとま願母不快ニ付被下
 金百疋被下 ひて
 十一月十五日天気子
 一今日日からよくニ付、しの塚平兵衛御屋敷
 へ御引移り候事、右ニ付内祝致候ニ付
 御方々様へ御鳥献上
 一御子様方へ 大黒せん・御くわし
 まんかん献上 こと
 十一月十六日夕雪丑
 一今日御屋鋪へ御道具 団 蔵
 しらへニ参り候事 富 山
 御蔵元より上り、ミかんまき候事 は ま
 御蔵元より上り、ミかんまき候事 千とせ
 一大坂表より帰り候由にて 御錠口吉 治
 かすていら一折献上 杉原善左衛門より 御小使二 人
 一今日吉野近辺へ引移り候事
 右ニ付罷出候事 とら

山形藩水野家奥日記

十一月十七日雲り雪少々とら	十一月廿五日	
一京地より今日御用向にて参り、岩崎彦右衛門御酒被進候事	一今日上京致候事	又兵衛
十一月十八日卯	一このわた献上	吉野
一無事	十一月廿六日	
十一月十九日天気辰	一吉野上り、御昼御膳被下	
一御用達 御くわし献上	一重三郎不快致候ニ付、床上■祝致候よし	
十一月廿日巳	御上奥一統へ御すもし献上	
一今日御屋敷へ御引移り候事	十一月廿七日	
寿印より金貳百疋被下	一中村罷出	
御方々様より金六百疋被下	十一月廿八日雲り	
御くわし二枚被下	一御屋敷へ御そうし参り候	ひて
一御方々様御肴料二百疋献上	朝五ツ時分より	八十
御次向	夕六ツ時分もとり候事	うた
富山へ百疋		千とせ
御側御次御末へ百疋		奥 附平兵衛
ことより		御錠口吉 次
十一月廿一日午	一御機嫌伺罷出候事	柘植内匠
一東京より御便り来ル	御殿所にて御酒被下候事	
お恵様御事御名あたらめ被進候 ²⁹⁾	一過ル廿六日より不快ニ付引込	豊吉右ニ
宜称 珪子	付今日より御錠口かばんとして、御錠口番	
殿様より御肴御目くろく書にて被進候	仰付られ候	猪坂次平
十一月廿二日	十一月廿九日	
一岩崎彦右衛門罷出御逢有御酒御肴被下	一御蔵元又兵衛御所より御用仰付られ候ニ	
一ゆわゆわ献上	付、方々様より 御肴一折被下候	
十一月廿三日	一今夜御蔵元にて ^{ばん} 義夫 ^(大説か) 御座候ニ付	
一今日柘植内匠御屋敷奥とりしまり仰付られ、右御礼罷出候	御方々様御覧所参り、金三百疋被下候事	
一御蔵元又兵衛此度京地より、	一宵夕より吉野上り	
御用召にて明後日上京致候ニ付、	十一月晦日天気	
御方々様へ御酒御吸物御肴品々献上致候事	一御屋舗へ御そうしニ参り候	富山
一此程又兵衛御目かね一ツ献上いたし候ニ		はま
付、金子入袋御挨拶方々被下候		と代
十一月廿四日		若な
一寒中伺罷出、からからせん献上		奥 附平兵衛
		御錠口吉 治

一御出入町人伊賀屋作次郎、玉子一かこ献上
十二月朔日天気

一寒中伺として御干くわし献上 古金仁兵衛
一明二日御屋敷へ御引移りニ付

方々様へ御吸物二種御肴御酒上り
一御蔵元より御引移りニ付、御吸物・御酒・
御肴・御焼物付御膳上り
御次向一統へも右同断

一御蔵へ御逗留中 御挨拶として
黒羽二重御紋付 又兵衛へ
ねつミ■す一重御小袖 安内か代へ
金三両つゝ 又蔵・重三郎へ
金千疋 子供兩人へ
御肴一折

一御表より御目くろく御挨拶として被下候事
一御手つたいニ上り 吉野・こと

一京地より御引移りニ付罷出、御吸物御酒被
下御側にて 彦右衛門・内匠

一此程より御用かゝり仰付られ候ニ付
御肴一折献上 内匠

一御蔵元又兵衛案内御側にて御酒被下候事
十二月二日天気

一今日五ツ半時御供揃にて、御屋敷へ御引移
りの事、
御引移りニ付、御かゆ上り、御祝い御
かわけ御酒上り、御祝御膳上り、御赤飯
被下一統ニ有

一夕御吸物御酒被下御側にて
彦右衛門
内匠奥付衆御いし

一御蔵元御供致罷出、御吸物御酒被下候、但
御手世間ニ付、天香堂にて被下候

又兵衛
又 蔵

十二月三日天気

一昨日の御礼として罷出 又蔵

御倣所にて御酒被下候事

十二月四日天気

御番団蔵

一無事

十二月五日天気

御番平兵衛

一東京より御用向是有候ニ付、明六日出立の
趣申上り 岩崎彦右衛門

御吸物御酒二種御さかな被下候事

一非しほり一反御やくそくに付相廻り、彦右
衛門より御払はいまた出不申候

一京都御用済ニ付もとり候由にて、奥附迄御
礼として罷出 古金又兵衛

十二月六日天気

一御機嫌伺上り

たら一本 中嶋せい

御花かさし三本献上

右御挨拶として金平唐一折被下

十二月七日雪少々

一今日より京都表彦右衛門替りとして相つめ
申候ニ付罷出、月六度ニ大津へ罷出候趣申
出候事 御用人内匠

十二月八日雪少々

一無事

十二月九日天気

一御機嫌伺罷出 古金重三郎

御むしいわし小折一・そうそう御煮付献上
奥附役所にて御酒被下候

十二月十日天気

一無事

十二月十一日天気

一今日出番勤致候 豊吉

- 十二月十二日天気
 一京都より今日もとり、御逢有 内匠
 一寒中伺として 志賀すゝ
 御小さかな しの塚より
 みのくし
 ひうを献上
 十二月十三日天気
 一御祝儀ニ付御昼御祝御膳上り
 御方々様御祝義有 奥附三人
 夕吸物無し 御いし周白
 召人御有合にて御酒被下
 十二月十四日天気
 一御機嫌伺罷出、一夜逗留致候 吉野
 御方々様へミかん・たら一本御初上り一統
 へ参り
 十二月十五日天気昼後より雪
 一今日下り候ニ付 吉野へ
 此程中より献上物御挨拶にて
 金二百疋被下候 同人へ
 一今日朝七ツ半時御立 御表人四人
 一御機嫌伺御えしき申上罷出 古金又蔵
 一京都より御到来ニ付、城様へ被進候事
 一東京より船廻り着致ス、此程たのみのさけ
 三本参り、一本ハ吉兵衛献上致候
 十二月十六日
 一京都より申上り
 殿様御事山形御家来の一条ニ付、禁足仰蒙
 らせられ候由
 方々様へ申上り 柘植内匠より
 一しほ引一尾被下 御蔵元又兵衛
 右御移り半紙一状参り
 一塩引一本奥一統へ被下
 十二月十七日雲り
 一無事
 十二月十八日雲り
 一御三方様へ 御はね・御はこ板 献上
 志賀すゝ
 十二月十九日雲り
 一御機嫌伺罷出 古金又蔵
 塩美まんちう一折献上
 御茶御くわし・御酒被下、夕御膳被下
 一夕暮方御機嫌伺罷出
 御酒御肴有合被下 又兵衛
 十二月廿日雲り
 一御機嫌伺罷出老寄ニ付、夜分伺かけん申付
 候事 三着
 献上物御挨拶として金百疋被下 三着
 一御道中より心得相つとめ候ニ付、御心付と
 して御目くろく、富山初奥附一統へ被下候
 事、但當暮計りの事
 十二月廿一日雲り子
 一御機嫌伺上り切かちん・御さかな献上 ふじ
 夕御膳被下候、たはこ被下候事、金■百疋
 被下候事
 一寿印大黒天、しの塚へ被下候事、
 十二月廿二日うし天気
 一御かんねり御すわり上り
 一御豆はやうニ付金五十疋御手元より被下
 団蔵相ため申候
 御昼御祝御膳御平日通りにて上り、夕御そ
 は上り、御吸物上り、御肴ひ物上り、御酒
 御肴少々
 十二月廿三日とら天気
 一東京より御便り来ル
 両殿様兼々御機嫌よく御座被遊候趣申上
 り、富山迄政田より文来ル
 一当九月二日おす賀殿御出産致候趣、御出生
 様御名お福様と式膳殿より申上り

一 お福様おす賀殿御事去廿七日ニ山形表より	御くわし献上・御とそ一
東京へ着致候事、三田御殿へ被成御住居候	一 東京へ御便り出候事
旨申上り	十二月廿七日午
一 寿印御りうし致候事	一金百疋卜別段御手元にてあわ済み申候事
金百疋被下 惣春	十二月廿八日未
十二月廿四日雨天卯	一 御歳暮御祝申上なし
一 御歳元より御ゆるこ献上、右移りニあま鯛	一 御平日通りにて御祝御膳上り
三枚被下 御次向奥一統へ参り候事	夕召人 御番奥附・御いし周白
一 御機嫌伺として罷出 杉原膳左衛門 ^(奉行)	十二月廿九日晦日申
御茶御くわし被下	一 御方々様へ夕御そは御吸物上り、御にほひ
十二月廿五日雨天辰	物御福茶上ル
一 御機嫌伺罷出 又蔵	一 御酒六ツわり一たる御手元にて上ル
御茶御くわし被下	一 御暮歳御祝義申上
十二月廿六日雨天巳	老松 金五十疋上
一 御機嫌伺罷出 三着	

【註】

- 1) お錦——忠精次女、嘉永4年(1851)山形で生まれる。
- 2) 12日に京都より出した手紙が19日に江戸の上屋敷についている(『水野忠精幕末老中日記』)。かもりは忠精に従って上洛した奥女中。その後手紙のやりとりは頻繁に行われている。
- 3) 御やとい——御雇、水野家奥女中の職制のひとつ。ふじは体調が悪く暇を許可された。亮寿院とお錦より下賜金がだされていることから、御二方付だったと思われる。
- 4) 越後長岡藩主牧野備前守忠恭、老中(外国御用掛)。長岡藩は奥羽越列藩同盟に参画し、家老河井継之助の指揮下、官軍と戦う。
- 5) 遠州相良藩主田沼玄蕃頭意尊、若年寄、元治元年(1864)水戸天狗党の乱に際し追討使として幕府軍を指揮して鎮圧にあたった。
- 6) 千代山——忠邦付の中老。忠邦の死により剃髪を希望するが許されず、その後老女、奥向取締りとなり、上屋敷の奥を取り仕切る。
- 7) 富山——老女、奥向取締り。明治元年には大津にいて江戸との連絡役を果たしている。
- 8) 幕府は江戸・京坂の長州藩邸を没収し、江戸では藩邸員を各大名邸へ預ける。
- 9) 越後椎谷藩主堀右京亮之美、祖父は水野忠光の三男忠彝。
- 10) きく、百合と名を改める——女中が名前を変えるのは昇格の時などが多い。
- 11) 有卦とは陰陽道の思想に基づくもので、縁起の良い年回りのことで7年間続くとされた。有卦入りには「ふ」のつく7つの品を贈り祝う風習があった。
- 12) 堀様奥様——信濃飯田藩堀親義夫人幸一忠邦妹
- 13) 市ヶ谷様奥様——紀州徳川家家老新宮藩水野家水野忠幹夫人辰一忠精養女
- 14) 結び初——一般には袴着といわれるが、羽織の紐を結ぶことから結い初ともいう。男子の儀礼で、幼児から少年になることを祝って、3才から7才頃までに行う。江戸時代以降は11月15日前後に行われるようになった。

- 15) かね初——お歯黒をつけはじめのことをいう。初めて歯を染めることを初鉄漿といい、江戸時代中期以降は、結婚前に行うことが多くなった。初鉄漿には、親戚や知人などから鉄漿親を立てて鉄漿付けの祝いをした。錦の場合は、忠邦の妹・堀親義夫人幸が鉄漿親となっている。
- 16) 髪置——幼児が髪をのばし始める儀式のことで、武家では3才の11月15日に行うことが多かった。
- 17) 福茶——縁起物の豆を入れて茶を飲んだと思われる。荒麦。
- 18) お恵様付はま御側格に昇格——女中には仕える主人と役職がある。
- 19) 蔵元——大坂にある大名の蔵屋敷の蔵物の保管や販売を管理した商人で、土分の待遇を受け各大名から扶持米を給与された。諸大名の窮乏により、大名貸しなど機能が多様化する。水野家の蔵元は古金又兵衛で、明治元年には亮寿院などの世話も引き受けている。
- 20) 大津四宮大明神祭礼。大津天孫神社の祭礼で、曳山がみもの。
- 21) 検校とは、当道座の盲人で、江戸時代は箏曲三弦の芸などを生活の糧としていた。江戸では山田流が、上方では生田流が主流であった。幕末に、上方で松浦検校や八重崎検校らが現れ、現在に残る名曲を多数作曲した。
- 22) 飯田表——信濃飯田藩堀家
- 23) 若狭小浜藩主酒井若狭守忠氏
- 24) 猪（女）子——陰暦10月の亥の日はイノコといわれ、牡丹餅を作って祝う。
- 25) 恵比寿講——恵比寿神をまつる行事。商売繁盛の神として商人に広く信仰された。1月と11月の20日頃に行われることが多い。
- 26) 江州浅井郡八木浜村、山形藩の所領のうち。
- 27) 一画減らす。恵→恵、統→紘、睦→睦
- 28) ひで母病気のため3夜^{いとま}暇——一般に暇は奉公をやめることをさすが、ここでは一時的な宿下がり^{いとま}を暇といっている
- 29) 10月18日に「恵・統・陸」が緯名となったのをうけ、恵は瑠と改名する
- 30) 寿賀（芳賀）忠精の側室。福を生んだ後、山形から東京に移り、若・豊次郎・鉦次郎・素を生む。明治12年（1879）12月21日女子を出生し、亡くなる。

解題

本資料は拙稿「奥女中奉公について」(『東京都江戸東京博物館研究報告』第3号)で、筆者が解読を進めることを約束したものである。横半2冊で、1冊は元治元年(1864)正月11日より12月晦日まで、もう1冊は明治元年(1868)9月朔日より12月晦までの日記である。表紙には「日記」とだけあり、「山形藩奥女中日記」というタイトルを資料整理の際に付与したが、本稿では「山形藩水野家奥日記」(以下「日記」)とした。

山形藩水野家は、天保の改革を行った老中水野忠邦が失脚隠居し、家督を継いだ忠精が浜松より山形へ移封されたことにより誕生した。水野忠精は忠邦と側室篠塚氏寿との間に、天保3年(1832)芝三田の中屋敷で生まれた。嘉永6年(1853)に奏者番、万延元年(1860)に若年寄となり、文久2年(1862)3月15日に老中に就任する。幕末の困難な時期に老中として政局に当たる。慶応2年(1866)に致仕し家督を忠弘に譲り、明治17年(1884)53才で没する。平成11年(1999)2月にゆまに書房より『水野忠精幕末老中日記』が出版されたことにより、忠精の研究が今後進捗する事が期待される。

日記の作者を考察する前に、日記が書かれた時期の忠精の家族構成を見てみたい。元治元年の時点では、正室愛(忠精の移封の後に浜松藩に入った井上正春の娘)は万延元年に没してすでにいない。生存している子供は1男3女で、嫡男忠弘・錦・恵・静である。他には生母亮寿院(寿)がいる。明治元年9月2日山形で福が生まれ、娘が一人増える。日記の作者は元治元年の時点では錦と一緒に暮らしており、殿様(忠精)からの下賜品についても錦と遜色がないかそれ以上で、日記の中では私と称しており、私付きの女中もいることがわかる。明治元年の日記の表紙に「寿印」とあり、本文中にも「寿印」という名がしばしば登場する。高貴な女性に対しては直接名前を記さず、印を付けて呼ぶことがある。「寿印」は錦・恵・静と同じ所にいる。これらのことから、この日記は、忠精の生母亮寿院の日記と考えられる。元治元年分は亮寿院自らが記し、明治元年分は奥右筆等の手による、より奥日記に近いものと言える。亮寿院は忠精を生んだ天保3年に中老となり、忠邦が死没した嘉永4年に剃髪、忠精が死没したと同じ年の明治17年に没する。

次に日記の書かれた場所、つまり亮寿院の住んでいたところであるが、元治元年は江戸中屋敷であると思われる。水野家の江戸屋敷は、忠精が老中に就任したことにより文久2年6月に西丸下(西丸下と呼ばれた地域は、老中や若年寄などの役屋敷があった場所)に拝領した上屋敷、芝三田に住宅を兼ねた中屋敷、渋谷・青山に下屋敷、青山・千駄ヶ谷に抱屋敷があった。本文中に「御上屋敷より使来ル」等という文言がしばしば見られることから、上屋敷ではないことは明白である。屋敷の機能や距離を考えると三田の中屋敷と推察できるが、忠弘が青山で生まれていることから、青山下屋敷の可能性もある。また、渋谷にも奥向きがあったことが、水野家文書よりわかる。この年、錦以外の子供たちは上屋敷に住んでいると思われる。明治元

年分は大津で書かれている。日記より大津に屋敷があったことがわかる。水野家は近江の坂田・浅井郡に5692石の領地を持っていた。

日記解読の一助とするため、元治元年、明治元年の政局と忠精・忠弘の動向について、簡単に解説を加えたい。また、日記に記載のある事項については（ ）内に日付を記した。

元治元年は14代將軍徳川家茂の2度目の上洛で年が明けける。忠精も家茂に追従して上洛、一足先に京都に入り、伏見で家茂を迎える(1/15)。2月20日元号が文久から元治へと改元される。3月7日家茂参内の供奉を勤め、拝領物を給わる。3月27日天狗党の乱起こる。5月2日に家茂の暇乞いの参内に供奉し太刀を拝領する(5/21)。5月7日家茂は下坂し天保山砲台築造所及び兵庫港を視察し、20日に江戸に帰還する(5/21)。忠精はその後も上方にとどまり、6月6日京都を発ち11日に江戸上屋敷に戻る(6/11)。6月18日権現様二百五十回御忌日光勅会執行の総奉行と西丸普請並びに移徙の事務取扱を命じられる(6/19)。文久3年6月に西丸が、11月に本丸が焼失し、田安仮御殿で政務が執り行われていた。本丸はその後再建されることなく明治を迎える。普請がなり7月1日に家茂と和宮の西丸への移徙が行われた。天璋院、本寿院は清水屋敷にとどまる。7月19日蛤御門の変が起こる。7月22日忠精、海陸御備向きの事務を行うことを命じられる。7月24日長州征伐布告。8月3日忠精、第一次長州征伐の進発事務並びに留守居を命じられる(8/3)。8月5日四カ国連合艦隊下関砲撃。8月13日征長出陣を命じる。9月1日参勤交代制復旧、水戸家も他の三家同様となる。10月5日幕軍、天狗党を総攻撃。11月萩藩降伏。11月10日幕閣は小栗忠順の主張を取り入れ老中水野和泉守忠精らの名で横須賀造船所設置を決定する。

明治元年1月鳥羽伏見の戦いが勃発する。前年慶応3年、新政府は徳川慶喜の大政奉還とともに諸大名らを京都に招致し、列侯会議を開こうとした。山形藩主水野忠弘に対し、10月22日に上京すべき旨通達があったが、山形藩では藩主幼少を口実に重臣値賀七左衛門を上洛させた。慶応2年9月忠弘に家督を譲った忠精は、翌3年3月より山形で病氣療養中である。江戸藩邸と山形で連絡を取り父子揃って上洛する結論に達し、明治元年3月22日忠精は山形を出発、29日江戸青山邸に入る(官軍が江戸に入ってきたため3月8日忠弘は青山邸に移っていた)。4月11日江戸開城。4月21日忠精は忠弘を伴って江戸を出発、閏4月12日着京。その後山形では藩主父子の帰国を誓願したが、忠精・忠弘は戊辰戦争終結まで京都に抑留された。明治元年日記は9月1日より始まっており、この間の事情は察せられないが亮寿院らが天津に向かったものこのときと考えられる。

次に、奥羽越地域の戦状に目を向けてみると、4月3日奥羽鎮撫大総督九条道孝が仙台に到着、当初山形藩は官軍側に立ち庄内藩と戦う。5月3日奥羽列藩同盟に参加(家老水野三郎右衛門が会議に参画、重臣志賀浅右衛門を京都に急行させ藩主親子の真意をたずね)し、その後官軍と戦う。5月6日北越6藩が同盟に加入し奥羽越列藩同盟となる。7月17日江戸を東京と改める。8月13日天皇東幸仰せ出される。忠精・忠弘父子は翌14日暇乞いに参内、15日京都出

発、9月朔日東京青山邸に入る(9/11)。9月8日年号を明治と改元。9月17日山形藩降伏。9月22日会津落城。10月3日外桜田と芝三田の両邸を下賜される(11/2)。8日忠精、青山邸より三田邸に移り、女中達は16日に引移る予定(11/2)。13日天皇着輦につき坂下門外で拝迎。15日参内、竜顔を拝す(11/2)。12月7日奥羽越諸藩に対する処分が決定。水野和泉守忠弘は謹慎を仰せつけられる(12/16)。奥羽越諸藩の中では最も軽い処分である。

[付記] 資料の翻刻原稿の作成について、吉岡孝氏にご協力を頂いた。記して感謝申し上げる次第である。